



学校だより

末子配付

第8号ジャカルタ日本人学校
令和3年(2021年)12月1日
校長 緒方克行
TEL: 021-745-4130

つながる笑顔 咲き誇れ ～Jump to the future～

「すごくドキドキして『しゃべれるかな?』『失敗しないかな?』と思っていたけれど大きな声でハキハキとしゃべれたので良かったです。」

「(発表中)友達にこっそりと周りの人に聞こえないように台詞を教えていて、なんだか感動しました。だって、つながっているすがたがすてきだったからです。」

「知らなかったことがたくさん知れてJフェス最高でした。」

先日、行われた JJS フェスティバル後に子どもたちが書いた感想です。

友達の発表の内容や頑張っていることがよくわかり、クラスを超えて、学年を超えて、そして学部を超えてしっかりとつながることができたようです。オンラインだったことで、日本にいる友達ともつながることができました。大変な状況の中でも、人と人は想いがあれば困難を乗り越えられると感じました。

準備を進める中でも、子どもたちは目覚ましい成長を見せました。例えば、JJS フェスティバルの準備を進める企画で始まったお昼の放送です。最初は早口になったり、声小さかったり、聞き取りにくいことがあったのですが、日を重ねるごとに上達していきました。自分の学年の取組を紹介するコーナーでは、どの学年もしっかりと練習をしてきて、元気の良い声が校内に響き渡っていました。放送室から出てきた低学年の発表者が、「すごくドキドキしたけれど、ちゃんと言って良かった。昨日は20回も家で練習した。」と高揚しながら話してくれました。出番は短くても、子どもはその一瞬のために準備を頑張り、本番に臨むのです。こうして達成感とともに大きく成長します。JJS フェスティバルの随所でそんな姿を見せてくれました。

JJS フェスティバルのフィナーレの映像を作成するに当たり、インドネシアで活躍されているシンガーソングライターの加藤ひろあきさんにご協力いただきました。

当日は、加藤さんの歌う「Terima kasih」をバックに、子どもたちが一人一人「ありがとうボード」を持った映像が流れましたが、実は準備当初、断られることを覚悟しつつこの企画をお願いしました。ところが返ってきた言葉が「ここで歌わなければどこで歌うの?」でした。加藤さんの子どもたちを想う気持ちに胸が熱くなりました。

「つながる笑顔 咲き誇れ」をテーマに取り組んできました JJS フェスティバルは、子どもたちのキラキラした笑顔で幕を閉じました。その時の想いは会の最後に語られた、生徒代表の秋山翔太さんの言葉に全て言い表されていると思いますので紹介します。

皆さん今自分の前、後ろ、右、左にいる友達や、先生方を見てください。今まわりにいる皆さんがたまたまインドネシアに来て、たまたま JJS に入学することになって、たまたま同じ学年で、たまたま一緒にクラスになって、その中でもたまたま隣りにいるのですから、今隣りにいる人に出会えたこと自体が奇跡なのです。そんな人たちと一緒に J フェスを作ることができて僕は本当に良かったと思います。みなさんも今日のことは絶対に忘れないでください。(抜粋)